

障害児・者きょうだいのメンタルヘルス

- 思春期から青年期にかけて -

岡本 直子*¹ 山本 真由美*²

Mental health of sibling Relationships
- A Comparison of adolescent with Disabled and No disabled Siblings -

Naoko OKAMOTO Mayumi YAMAMOTO

Abstract

The purpose of this study examined mental health of adolescent siblings of the obstacle children. The method used the questionnaires consisting from stress condition, cause of stress, social support. As a result, the group of adolescent siblings of the obstacle children was lower than the group of adolescent siblings of the normal children in stress condition, cause of stress, except of studying. Regarding social support the former group was lower than latter one about support of the obstacle children and was higher than latter one about their parents, homeroom teacher and friends significantly.

key words : mental health, disabled siblings, adolescence

*¹ 医療法人社団 以和貴会 いわき病院 The Medical Corporation Iwaki Society, Iwaki Hospital

*² 徳島大学総合科学部 Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima

はじめに

障害児・者と彼らの周囲の人間との関係を調べた研究では、その対象者はほとんどが母親である。「障害児・者の家族」と記述されている場合であっても、きょうだい、父親が対象者であることはなかった。しかし近年、障害児・者のきょうだいがようやく注目され始めた。

そもそもきょうだい関係とは、他人との関係を学習する最初の機会であり、他者と関わっていくために必要な、協調すること、分け合うこと、あるいは競争することなどを学ぶ機会である(清水 1986)。しかし、障害のある子どものきょうだいでは、障害のある子どもの社会性の発達の問題などで、それが困難になるかもしれない(平川 1993)という見方もある。また、雇用問題など障害児・者をとりまく状況も厳しい状態にあり、きょうだいにもその影響が懸念される。

このような問題が指摘される中、障害児・者のきょうだいに関する研究も増えつつある。

対象者の年齢や発達段階に注目していくつかの研究を概観してみる。乳児期から学童期にかけての研究では、後藤ら(1982)の母親面接による、きょうだいの発達課題の研究がある。そこではきょうだいが障害児であるために生ずる心理的課題が挙げられている。それによるとおよそ1歳半までは、きょうだいが障害児であることは意識されないが、自分が愛され、手をかけてもらえる存在であることの実感を得ることが必要であるとしている。次に、およそ1歳半から3歳までは、きょうだいが障害児であるとの認識は漠然とでき始めている。しかし、情緒的にも不安定で、母子関係の再認識が必要な段階であるため、障害児きょうだいの存在が、自分にとって、デメリットとはならないことの実感を得ることが必要である。そしてきょうだいとは独立の存在としての自己を認識することを通して、そのことが可能となると述べている。また、およそ3歳半から6歳までは、障害児をきょうだいに持った自分の立場を認識することにより、そうした状況に適応しようとする。そうした努力の中で、自分にとっての障害児きょうだいの存在の肯定的側面と否定的側面を認識し、アンビバレントな感情を整理していくことが課題となるとしている。最後に学童期では、障害をもったきょうだいと、そうしたきょうだいを持った自分の立場の理解と受容をすすめることが可能であり、かつ必要な段階である。両者は運命共同体ではないとの認識を周囲の人が積極的に伝えることが、そうした展開を可能にするとしている。

また、三原(1998)は、幼少期の体験や両親とのかかわりなどを中心にきょうだいの生活体験について調べている。その中で、調査協力者は幅広い年代で障害者の存在によって学校でつらい体験をしていたと報告している。

社会人のきょうだいの特徴として、橘・島田(1998)は障害者をきょうだいにもつ者の意識に関する調査の中で、「きょうだい関係の家族に対する影響」と「老後における相互の援助」は社会人の方が高校生や大学生に比べて意識が高いと報告している。また、「きょうだいを念頭においた結婚」は父母の年齢が高い者ほど意識が高い。これらのことから社会人は年齢的に障害者きょうだいを含めたさまざまな問題が現実味を帯び、障害者きょうだいを抜きにしては考えられない傾向にあるとしている。また、高校生では障害者きょうだいに対するアンビバレントな意識も見られると指摘している。

以上のように、様々な発達段階において、障害児・者のきょうだいは多くの課題を背負っていることがわかる。

これまでみてきたように、障害児・者のきょうだいは多くの負荷を経験する。特に思春期から青年期にかけてのきょうだいは、大人へと成長していくための大きな変動を経験するだけでなく、受験や自立という困難に立ち向かう時期である。しかし、この時期の障害児・者のきょうだいに着目した研究は非常に少ないのが現状である。よって本研究では思春期から青年期の障害児・者きょうだいに焦点をあて、この年代のきょうだいが抱える悩みやストレスを明らかにすることを目的とする。

この目的のために障害児・者のきょうだいとそうでない者のきょうだいのメンタル・ヘルスを調査、比較し、障害児・者のきょうだいのメンタル・ヘルスを明らかにする。仮説として、きょうだいに障害児・者がいるものは、きょうだいに障害児・者がいない者に比べてストレスが高く、ソーシャルサポートが少ないと考えた。

なお、本研究における「きょうだい」と「同胞」の使い分けは、障害のある人の健常な兄弟姉妹を「きょうだい」と、障害のある兄弟姉妹を「同胞」とした。

方法

(1) 対象者

対象群はA県内の障害児・者のきょうだい267名(B施設、C養護学校およびD養護学校)を対象とした。回収率は26.6%(71名)、有効回答率は22.5%(60名)であった。

統制群はA県内の中学生および高校生(E中学校およびF高等学校)418名を対象とした。回収率は96.4%(403名)、有効回答率は80.3%(336名)であった。

(2) 実施方法

1) 調査時期 2005年7月中旬から12月下旬

2) 調査内容(資料1)

① フェイスシート

性別、きょうだいの有無、きょうだいのいる人は、障害のあるきょうだいの有無、障害のあるきょうだいのいる人は、きょうだいの年齢と性別を記入する欄を設けた。対象群に配布したものについては上記の項目、年齢ときょうだいに接する際に気をつけていることについての自由記述欄(資料2)を設けた。

② メンタル・ヘルスチェックリスト

岡安ら(1999)が作成したメンタル・ヘルスチェックリストに一部項目を追加して使用した。本チェックリストは、A「ストレス症状」、B「ストレス因」、C「ソーシャルサポート」の3尺度から構成されている。A尺度は「全くあてはまらない(3点)」、「少しあてはまる(2点)」、「かなりあてはまる(1点)」、「非常にあてはまる(0点)」の4件法で全16項目、得点範囲は0点~48点である。B尺度は「全然なかった(3点)」、「たまにあった(2点)」、「ときどきあった(1点)」、「よくあった(0点)」の4件法で全12項目、得点範囲は0点~36点である。C尺度は「ちがうと思う(1点)」、「たぶんちがうと思う(2点)」、「た

ぶんそうだと思う (3点)」、「きっとそうだと思う (4点)」の4件法で全16項目、得点範囲は4点~64点である。

追加項目は、自分の経験を基にしたもの、障害児・者のきょうだいが書いた手記を参考にしたもの、既存の項目を変更したものの3種類である。Table 1に示した追加項目のうち、既存項目とは、この場合、メンタル・ヘルスチェックリストのB尺度(ストレス因)を示す。既存尺度とは、菊島(1999)が作成した児童青年期用ストレス尺度のことである。この児童青年期用ストレス尺度の「親に関するストレス」の尺度から数項目を選び、表現を変え使用した。ここで用いた「障害児・者の手記」とは、広川(2003)に掲載されていたものである。

C尺度では、サポート源の「父親の場合」、「母親の場合」、「担任の先生の場合」、「友だちの場合」に「きょうだいの場合」を追加した。

なお、項目の追加により、B尺度及びC尺度は、いずれも20項目となった。A尺度の項目数及び得点範囲には変更はない。

Table 1 B尺度への追加項目

(4) きょうだいと比較されていやな思いをした	自分の経験から
(9) きょうだいにじゃまをされた	障害児・者の手記
(14) きょうだいとケンカをした時に、相手が悪いのに自分のせいにされた	自分の経験から
(19) きょうだいにいやなことをされたり、言われたりした	既存項目の変形
(5) 親が自分の要求を受け入れてくれなかった	既存尺度の変形
(10) 自分は悪くないのに親にしかられた	既存尺度の変形
(15) 自分が何かしている時に、家の手伝いを頼まれた	既存尺度の変形
(20) 親が自分のことを過度に期待していた	既存尺度

3) 調査手続き

対象群については、養護学校、施設等を通して調査用紙を配布し、郵便による返送で回収した。統制群については、調査者が中学校および高等学校の各クラスで、調査の目的、回答方法等を説明した上で、調査用紙を配布し、回収した。

結果

調査対象者のうち、回答の不備な者等を除く 396 名を分析対象とした。その内訳は対象群 60 名（男性 28 名，女性 32 名），統制群 336 名（男性 155 名，女性 181 名）であった。

対象者の属性は Table 2 に示すとおりである。

	全体	対象群	統制群
男性(人数)	183	28	155
女性(")	213	32	181
全体(")	396	60	336
平均年齢(歳)	—	15.1	—

(1) メンタル・ヘルスチェックリスト B 尺度（ストレス因）の因子分析

メンタル・ヘルスチェックリストの B 尺度（ストレス因）に 8 項目を加えて調査を実施したため、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。その結果、追加した 8 項目のうち、項目（15）と項目（20）は、いずれも因子負荷量がどの因子に対しても低かったため、これらの項目を削除した。残りの 6 項目については、2 つの因子が抽出された。そのひとつが項目（9）、（14）及び（19）に共通する因子であり、これを第 4 因子とした。今ひとつは、項目（4）、（5）及び（10）に共通する因子であり、これを第 5 因子とした。そこで第 4 因子は、きょうだいから生じるストレスとして、「きょうだい関係」、第 5 因子は親から生じるストレスとして「親との関係」と各々命名した。なお、既存尺度の部分は、既存の因子通りに分類された。因子分析の結果および信頼性係数（Cronbach の α 係数）を Table 3 に示す。

Table 3 B尺度(ストレス因)因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
先生との関係 ($\alpha=.824$)					
(11) 先生が、えこひいきをした	.814	-.059	-.044	-.095	.070
(16) 先生が自分を理解してくれなかった	.806	.058	-.040	.121	-.138
(6) 先生から、自分と他人を比べるような言い方をされた	.703	-.019	.023	-.010	.095
(1) 自分は悪くないのに、先生からしかられたり、注意されたりした	.611	.037	.112	-.016	-.041
友人関係 ($\alpha=.774$)					
(17) 友だちに、いやなことをされたり、言われたりした	-.028	.939	-.058	.065	-.089
(12) 自分の性格のことや自分のしたことについて、友だちにいやなことを言われた	.036	.752	-.049	-.008	.064
(2) 顔やスタイルのことで、友だちにいやなことを言われた	.003	.581	.087	-.116	.072
(7) クラスの友だちから、仲間はずれにされた	.000	.426	.124	-.015	-.006
学業 ($\alpha=.747$)					
(18) 試験や通知表の成績が悪かった	.014	-.003	.779	-.035	-.051
(3) 先生や両親から期待されるような成績がとれなかった	-.003	.038	.743	-.074	.046
(8) 一生けんめい勉強しているのに、成績がのびなかった	-.011	-.020	.535	.211	-.098
(13) 人が簡単にできる問題でも、自分にはできなかった	.037	.051	.473	-.011	.112
きょうだい関係 ($\alpha=.705$)					
(9) きょうだいにじやまをされた	.034	-.023	-.065	.730	-.095
(19) きょうだいにいやなことをされたり、言われたりした	-.075	-.004	.084	.706	-.010
(14) きょうだいとケンカをした時に、相手が悪いのに自分のせいとされた	.038	-.049	.080	.502	.231
親との関係 ($\alpha=.735$)					
(5) 親が自分の要求を受け入れてくれなかった	-.002	-.031	-.020	-.123	.882
(10) 自分は悪くないのに親にしかられた	.032	.041	-.090	.301	.554
(4) きょうだいと比較されていやな思いをした	-.040	.077	.082	.082	.494
尺度全体 ($\alpha=.861$)					
削除項目					
(15) 自分が何かしている時に、家の手伝いを頼まれた					
(20) 親が自分のことを過度に期待していた					

今回使用した尺度は、中学生用に作成されたものであるが、これをそのまま高校生にも使用した。そこで分析に先立ち、中学生と高校生の結果に統計的に差があるかどうかについて検定を行った。中学生と高校生のそれぞれを尺度の各因子得点を10パーセント値ごとに区切り、その分布を求め、中学生と高校生の間に差があるかどうかを統計的に分析するためF検定を行った。その結果、いずれの因子も有意な差は認められなかった。そこで、中学生および高校生のデータを一括して分析することとした。

まず、統制群の因子ごとに、平均値と標準偏差を算出した。次にA尺度およびB尺度については、「平均値+1SD」以上を高群、それ以外を普通群とし、高群に属する者に「2」の値を、普通群のそれに「1」の値を与えた。C尺度については、「平均値-1SD」以下を低群、それ以外を普通群と分類し、それぞれに「1」と「2」の値を与えた。対象群は、統制群を基準として、「2」と「1」又は「1」と「2」の値に変換した。

統制群と対象群のデータ数に大きな差があったので、「加重性の一変量の分散分析」を用いて、同胞の有無別に各因子における差の検定を行った。なお η^2 は効果量を表し、相関係数と同様に0~1の間で推移し、0.4以上で高いとされる。

(2) メンタル・ヘルスチェックリスト A 尺度 (ストレス症状)

メンタル・ヘルスチェックリスト A 尺度 (ストレス症状) の各因子における同胞の有無による一変量の分散分析の結果は Table 4 に示すとおりである。

Table 4 ストレス症状別同胞の有無による一変量の分散分析

因子名	群	平均値	自由度	F値	有意確率	η^2
〈身体症状〉	対象群	1.067	1, 59	1078.857	p<.001	.948
	統制群	1.220				
〈抑うつ・不安〉	対象群	1.083	1, 59	906.455	p<.001	.939
	統制群	1.152				
〈不機嫌・怒り〉	対象群	1.100	1, 59	793.222	p<.001	.931
	統制群	1.182				
〈無力感〉	対象群	1.150	1, 59	611.980	p<.001	.912
	統制群	1.164				

ストレス症状の各因子では、統制群に比較して対象群が有意に低かった。対象群は統制群よりストレス症状が少ないという結果になった。

(3) メンタル・ヘルスチェックリスト B 尺度 (ストレス因)

メンタル・ヘルスチェックリスト B 尺度 (ストレス因) の各因子における同胞の有無による一変量の分散分析の結果は Table 5 に示すとおりである。

Table 5 ストレス因別同胞の有無による一変量の分散分析

因子名	群	平均値	自由度	F値	有意確率	η^2
〈先生との関係〉	対象群	1.190	1, 59	713.884	p<.001	.924
	統制群	1.117				
〈友人関係〉	対象群	1.067	1, 59	1078.857	p<.001	.948
	統制群	1.164				
〈学業〉	対象群	2.000	1, 59		n. s.	1.000
	統制群	2.000				
〈親との関係〉	対象群	1.083	1, 59	906.455	p<.001	.939
	統制群	1.220				
〈きょうだい関係〉	対象群	1.136	1, 59	638.142	p<.001	.917
	統制群	1.173				

学業の因子では、標準偏差で分類する際にすべてのデータが 2 に分類され、差をみることはできなかった。学業以外の各因子においては、すべて統制群に比較して対象群が有意に低かった。対象群は統制群よりも、ストレス因が少ないという結果になった。

(4) メンタル・ヘルスチェックリスト C 尺度(ソーシャルサポート)

メンタル・ヘルスチェックリスト C 尺度 (ソーシャルサポート) の各因子における同胞の有無による一変量の分散分析の結果は、Table 6 に示すとおりである。

Table 6 ソーシャルサポート別同胞の有無による一変量の分散分析

因子名	群	平均値	自由度	F値	有意確率	η^2
〈父親〉	対象群	1.800	1, 59	1194.750	p<.001	.953
	統制群	1.712				
〈母親〉	対象群	1.883	1, 59	2030.650	p<.001	.972
	統制群	1.774				
〈担任教師〉	対象群	1.800	1, 59	1194.750	p<.001	.953
	統制群	1.744				
〈友だち〉	対象群	1.867	1, 59	1179.077	p<.001	.968
	統制群	1.780				
〈きょうだい〉	対象群	1.525	1, 59	541.244	p<.001	.903
	統制群	1.699				

ソーシャルサポートの各因子においては、きょうだい因子を除くすべての因子で統制群に比して対象群が有意に高かった。統制群よりも対象群の方がソーシャルサポートが多いという結果になった。きょうだい因子では逆に、統制群に比較して対象群が有意に低かった。統制群よりも対象群の方が、きょうだいからのソーシャルサポートが少ないという結果になった。

考察

本研究では障害児・者のきょうだいとそうでない者のきょうだいのメンタル・ヘルスを調査、比較し、障害児・者のきょうだいのメンタル・ヘルスを明らかにすることを目的とした。

本研究においては、メンタル・ヘルスチェックリスト B 尺度 (ストレス因) にきょうだいに関する項目及び親に関する項目を各々4項目追加した。因子分析の結果、きょうだいに関する4項目のうち1項目 (項目 15) と、親に関する4項目のうち1項目 (項目 20) については、その因子負荷量が低かったため、これらを除外した。「メンタル・ヘルスチェックリスト B 尺度」自体の各項目は、第 1 因子の「先生との関係」、第 2 因子の「友人関係」、第 3 因子の「学業」という既存尺度における既存因子のとおりに分かれた。つまり、ストレス因として「きょうだい関係」と「親との関係」があることが明らかとなった。

筆者が追加した項目で、第 4 因子と第 5 因子が抽出された。第 5 因子「親との関係」になった項目 4「きょうだいと比較されていやな思いをした」は、項目追加時は、きょうだい関係のストレスとして考えていた。しかし、因子分析の結果第 5 因子「親との関係」になった。この理由として、きょうだいを比較するのは主に親であり、親が比較することでいやな思いをするために、親との関係におけるストレスと認知されたことによると考えられる。

項目 15「自分が何かしているときに、家の手伝いを頼まれた」の因子負荷量が小さかつ

た理由として、家の手伝いをするのはある程度当たり前であり、家の手伝いがストレスとなる要因とは限らないことが考えられる。また、項目の中に親などの手伝いを頼む人の主語がなく、あいまいなことも因子負荷量が小さかった理由として考えられる。

項目 20「親が自分のことを過度に期待していた」の因子負荷量が小さかった理由として、「過度」の意味が伝わっていない可能性が考えられる。メンタル・ヘルスチェックリストを実施した際、中学生から、「過度」の意味を質問された。また、後に中学生から「意味が分からなかったので適当に回答した」との話を目にした。このことから、「過度」の意味が分からないままに回答したケースが多いのではないかと考えられる。そのため、因子負荷量が小さかったと推測される。

障害児・者をきょうだいに持つ生徒のメンタル・ヘルス状態を明らかにするために、障害児・者のきょうだいと、そうでない者のメンタル・ヘルスを加重性の一変量の分散分析にかけたところ、いくつかの点で、対象群と統制群との間に有意な差が認められた。

まず、対象群が統制群に比して、きょうだいからのサポートが有意に少なくなっていた。その理由として、同胞に障害があるために、サポート源にはなりづらいことが考えられる。回収した質問紙の空白に「きょうだいに障害があるため、分かりません」と記し、サポート源の「きょうだい」の項目に回答していない者もいた。きょうだいに障害があり、そのためにきょうだいにサポートを求めることができない、もしくはサポート自体を期待していないとも考えられる。

次に、対象群のストレス症状及びストレス因は、統制群のそれらに比して、いずれも有意に少なかった。一方、対象群の「きょうだい以外からのソーシャルサポート」は統制群のそれに比して有意に多くなっていた。

三原（1998）は幼少期の生活体験を調査し、調査協力者の幅広い年代で障害者の存在によって学校でつらい体験をしていたことを報告している。橘・島田（1998）は将来のきょうだい関係に対する意識調査の中で、高校生には、障害者きょうだいに対するアンビバレントな意識が見られると指摘している。

有村（1986）は自閉症児のストレスとして、①家族全体の犠牲感からくるストレス、②きょうだい自身の家庭での犠牲からくるストレス、③日常生活での疲労感からくるストレス、④問題行動への対処のとまどいからくるストレスの 4 つのストレス因子を見出している。

また、障害児者をきょうだいに持つ児童・生徒への支援に関する研究も報告されている。平川（2004）は、①自閉性障害の客観的・科学的な知識を身につけ、自分のことばで友人に自閉症を説明できるようになる、②カタルシスを図る、③自閉症児・者の問題行動への対処方法を学ぶ、④福祉思想の形成、⑤きょうだい間の連携、⑥発達の程度のよい自閉症児・者の受け皿、という 6 つの目標を掲げて自身が実践している、きょうだい教室について紹介している。

このことから、障害児・者のきょうだいは何らかの問題を抱えており、また、特別な支援を要しているものと思われる。

本研究で得られた知見は、それらの先行研究とは異なるものであった。その理由として、きょうだい以外からではあるが、ソーシャルサポートが多いことが考えられる。ソーシャルサポートの多さがストレス症状の低減やストレス因の少なさと関連しているものと思わ

れる。

本研究では、障害児・者のきょうだいは対象群に比べて、ストレス症状が低く、ストレス因についても学業以外は少なかった。ソーシャルサポートに関しては、きょうだいからのサポートは有意に少ないこと、父、母、担任教師、友人からのサポートは有意に高いことが明らかとなった。

ソーシャルサポートについては対象群が統制群よりも高かった。

今後の課題として、障害児・者のきょうだい人数を増やして調査をすること、ソーシャルサポートとストレス症状、ストレス因との関係を明らかにすること、障害児・者のきょうだいのメンタル・ヘルスについてより質的に考える必要があることなどが考えられる。

謝辞

本研究にご協力をいただいた、関連施設の方々、学校関係者のみなさま、そして、アンケートにご協力いただいたすべてのみなさまへ、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 有村浩一 1986 自閉症児をもつ同胞の意識に関する研究 - ストレスの測定を通して - 昭和 60 年度鹿児島大学教育学部卒業論文
- 後藤秀爾・鈴木靖恵・佐藤昌子・村上英治・水野博文・小島好子 1982 重度・重複障害児の集団療育 (3) - 健常児兄弟の発達課題 - 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学) 29 205-214
- 平川忠敏 1993 自閉症の医療・教育・福祉 日本文化科学社
- 平川忠敏 2004 自閉症のきょうだい教室 児童青年期精神医学とその近接領域 45 (4) 372-379
- 広川律子 (編) 2003 オレは世界で二番目か? 障害児のきょうだい・家族への支援クリエイツかもがわ
- 菊島勝也 1999 児童青年期用ストレスサー尺度 < (財) パブリックヘルスリサーチセンター 2004 ストレススケールガイドブック 77-81 実務教育出版 >
- 北村弥生 2000 米国における特別なニーズのある子ども (人) の同胞 (兄弟姉妹) に対する支援 作業療法ジャーナル 34 83-86
- 三原博光 1998 知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について - 幼少期の体験や両親とのかわりなどを中心に - 発達障害研究 20 (1) 72-78
- 茂木千明 2002 自閉症児のきょうだいと家族 心理劇的ロールプレイングの観点から見たきょうだいケアの事例 心理臨床学研究 20 (3) 252-264
- 岡安孝弘・高山巖 1999 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 6 73-84
- 清水弘司 1986 きょうだい関係 講座人間関係の心理 - 1 家族の人間関係 (I) 総論 島

田一男（監修）ブレーン出版 91-116

橘英爾・島田有規 1998 障害児者のきょうだいに関する一考察 - 障害をもったきょうだいの存在を中心に - 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 48 15-30

<資料 1>

アンケートのお願い

このアンケートは皆さんのこころの健康について考えるために実施するものです。あまり深く考えずに、思ったまま回答してください。行を間違えないように、もれなく記入してください。なお、このアンケートは修士論文作成のため、公刊論文作成のためだけに使用し、アンケートの結果は統計的に処理され、個人を特定したり、アンケートを先の目的以外で使用することはありません。

ご協力をよろしくお願いいたします。

徳島大学大学院 臨床心理学専攻 2年 岡本直子
指導教員 教授 山本真由美

【連絡先】徳島大学大学院 臨床発達心理学研究室
〒770 - 8502 徳島市南常三島町 1 丁目 1 番地

メンタルヘルスチェックリストは現在、市販されておりますので、そちらをご参照ください。

あなたご自身についておうかがいします。

- ① あてはまる性別に○をしてください。

男性 女性

- ② きょうだいはいますか、あてはまる方に○をしてください。

いる いない

- ③ ②で『いる』と答えた方におうかがいします。
きょうだいに障害のある方はいますか、あてはまる方に○をしてください。

いる いない

- ④ ③で『いる』と答えた方におうかがいします。
障害のあるきょうだいの年齢と性別を教えてください。

年齢	性別	
歳	男性	女性
歳	男性	女性
歳	男性	女性

次のページに進んでください

<資料 2>

〇〇（学校名等）のごきょうだい（中学生以上）の皆様

アンケートのお願い

初めまして、私は徳島大学大学院で臨床心理学を学んでいる岡本直子と申します。私はボランティア活動を通じて障害のある方々と関わるなかで、障害のある方のごきょうだいのサポートについて考えたいと思うようになりました。

そこで、このアンケートを実施し、ごきょうだいの皆さんのこころの健康について考え、今後のサポートのあり方に生かしていければと考えております。アンケートにはあまり深く考えずに、思ったままご回答ください。行を間違えないように、ご記入ください。なお、アンケートの結果は統計的に処理され、個人を特定するようなことはありません。また、修士論文作成のため、公刊論文作成のためだけに使用し、目的以外で使用することはありません。集計結果は、年度末に学校を通じて皆さんにお知らせする予定です。

ご協力をよろしくお願いいたします。

徳島大学大学院 臨床心理学専攻 2年 岡本直子
指導教員 教授 山本真由美

【連絡先】徳島大学大学院 臨床発達心理学研究室
〒770 - 8502 徳島市南常三島町 1丁目 1番地

※ 中学生以上のごきょうだいがご回答ください。なお、該当するきょうだいがおられない場合は、このまま破棄してください。お手数をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。

※ また、以前にこのアンケートにご協力いただいたことのある方は、そのまま破棄してください。ご協力ありがとうございました。

あなたご自身についておうかがいします。

- ① あてはまる性別に○をしてください。

男性 女性

- ② 年齢を教えてください。

_____ 歳

- ③ きょうだいはいますか、あてはまる方に○をしてください。

いる いない

- ④ ③で『いる』と答えた方におうかがいします。
きょうだいに障害のある方はいますか、あてはまる方に○をしてください。

いる いない

- ⑤ ④で『いる』と答えた方におうかがいします。
障害のあるきょうだいの年齢と性別を教えてください。

年齢	性別	
歳	男性	女性
歳	男性	女性
歳	男性	女性

次のページに進んでください

【D】あなたは普段きょうだいに接するとき、どのようなことに気をつけていますか。
具体的に教えてください。



アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。
記入間違いがないか、もう一度ご確認ください。
このアンケートは同封の返信用封筒に入れ、年内にポストに投函してください。
切手は不要です。よろしくお願いいたします。